

## 5-2 教育改革のための情報通信技術活用に伴う知識と戦略的活用の普及

### 5-2-1 私情協 教育イノベーション大会

#### <事業計画>

大学におけるデジタル変革(DX)が今後一層進展していくことを踏まえて、教育改革に向けたDX、学生支援改革に向けたDX、業務改革に向けたDXの観点から、先行して取組んでいる好事例の紹介及び意見交流を行う。例えば、ハイブリッド型授業による教育改革、オンライン授業の成績評価と不正防止対策、国際通用性が求められる遠隔海外連携授業、メタバース(仮想空間)を活用した対話教育の可能性、オンライン授業による学生のメンタルヘルス、改正個人情報保護への対応などについて、情報提供又はシンポジウムなどを行う。また、ICT利活用による授業改善の研究や学修成果の可視化など実践事例の発表、大学・賛助会員連携によるICT導入・活用事例の紹介を通じて理解の促進・共有を図る。

#### <事業の実施結果>

「教育イノベーション大会運営委員会」を継続設置し、「私情協 教育イノベーション大会」を実施した。以下に、委員会及び教育イノベーション大会の活動を報告する。

#### 教育イノベーション大会運営委員会

2022年(令和4年)7月16日、7月27日、2023年(令和5年)3月6日に平均11名が出席し、3回開催して「私情協 教育イノベーション大会」の企画・実施準備とアンケート結果による振り返りを行った。

##### (1) 開催要項の策定

- ① 大会のテーマは、「学びの自由度・質を高めるDXへの取組みと人材の育成」とした。開催の趣旨は、ニューノーマルにおける大学の教育改革の方向性を共有するなかで、学修者本位の教育の実現と学びの質向上に向けたDXの取組み、世界を意識した人材の育成、グローバル人材の育成への取組み、学修行動データによる学修分析、学生のメンタルヘルスへの対応、データ活用力育成に向けた教育実践の紹介、著作権法改正に伴う権利処理の対応、スタートアップ教育によるイノベーション人材の育成、データサイエンス・AI人材育成の授業事例の紹介を行うとともに、ICT利活用による授業改善の研究や学修成果可視化などの実践又は研究事例の発表などを通じて理解の促進を図る機会とした。
- ② 第1日は、「全体会」として、「ニューノーマルにおける高等教育の姿と国の支援」、「世界を意識した人材の育成を考える」、「社会のDX活用：保険料を変動させるDXの取組みと組織改革」、「グローバル人材の育成：学生主体の柔軟な学びの環境を考える」、「教育DXに向けた学びのプラットフォーム作りの取組み」、「起業教育に対する国の支援と今後の取り組み」について理解を共有することにした。
- ③ 第2日は、「テーマ別意見交流」として、「学修者本位の教育、学びの質向上を目指すDXの試み」、「コロナ禍での学生のメンタルヘルスを考える」、「質向上を目指すオンライン授業、ハイブリッド授業」、「スタートアップ教育を考える」、「国際連携協働学習(COIL)」、「著作権法改正に伴う権利処理の注意点と補償金制度」、「授業改善とラーニングアナリティクス(LA)」、「オンライン授業の学修評価と試験方法」、「データサイエンス・AI人材育成の支援」をとりあげるとともに、本協会でも検討している情報活用モデルの授業への理解促進を図るため、「データ活用力育成に向けた授業実践の紹介」を含め、10の分科会を設けて意見交換することにした。
- ④ 第3日は、教育改善に向けたICT活用の発表及び意見交流の機会を提供するため、参加者を募集して実施することにした。また、大学と企業連携によるICT環境導入事例は事前に紹介ビデオを作成したものを休憩時間に配信することにした。なお、開催要項は、次ページを参照されたい。



## (2) 実施結果

9月6日から8日の3日間、オンラインによるテレビ会議(東京市ヶ谷の私学会館から配信)により、49大学、8賛助会員、視聴者数は、初日に173名、翌日に243名、最終日に205名の参加があった。以下に、全体会、テーマ別意見交流で確認された主な点とアンケートによる実施結果を報告する。

### 1. 全体会で確認された主な内容

#### 【ニューノーマルにおける高等教育の姿と国の支援】

(1) 「高等教育におけるデジタル人材養成の推進」では、コロナ禍を経てデジタル技術を活用した教育は、多様な学習ニーズに対応するためのものになりつつあり、対面授業にも負けない深い学びや学修者本位の大学教育が提供できると考えている。一つは、遠隔授業で取得できる60単位の上限への算入を不要とする特例措置を講じた。二つは、遠隔授業を実施できるようなシステムやサーバの整備、カメラ・音声機器等、学生へ貸し出しするルーターや遠隔授業を行う技術面、教育面を支援する体制の整備など補正予算で約100億円を予算措置した。三つは、「スキームD」を展開し、教職員が授業価値を最大化するアイデアを提案し、企業とのマッチングで成功事例を積み上げ、その成果を発信すること考えている。四つは、大学等のDXを迅速に推進し、その成果の普及を図るため、「学修者本位の教育の実現」、「学びの質の向上」に資する環境整備として、令和2年度第3次補正予算60億円を確保して実施した。五つは、「デジタルと専門分野の掛け合わせによる産業DXをけん引する高度専門人材育成事業」として、第3次補正で46億円を計上し、39件採択している。また、教理・データサイエンス・AI教育では、認定プログラムの普及促進を進めていることが紹介された。

#### 【世界を意識した人材の育成を考える】

(2) 「大学教育を変えていくには：リベラルアーツと学びの壁を取り払う覚悟」では、DXは社会構造の転換で、それに合わせて教育の構造も変化することになる。第一点は、新しい社会構造では自分が自分の人生を作り、努力しなければならない時代になり大学教育で学年のオープン化が進み、いろいろな思いや目的を持って学んでいく人達の集まりの場になってきている。第二点は、イノベーターの育成が必要になり、大学教育でイノベーター育成のカリキュラムをどのように組み込むかが課題となっている。第三点は、知識をつなぎ合わせる必要がある。自分の持っている知識が社会でどのように繋がるのかを考え、実際に実践していく場を提供できないといけない。その中でリベラルアーツの養成が重要になる。それには、大学はどう変わるべきか、オープン化を推進するために学年の「壁」、卒業の「壁」を壊す必要がある。また、イノベーターを育成していくために、専門課程の知識とイノベーターの育成を接続するカリキュラム作りが必要となる。さらに、リベラルアーツを養成していくために、判断力を鍛える実践的な訓練を授業で定着させることが大事である。デジタル技術が社会のトランスフォーメーションのために開発され、企業・大学の教職員などすべての人が協働して日本の新しい教育の場を形成することに貢献する必要性が確認された。

#### 【社会のDX活用：保険料を変動させるDXの取組みと組織改革】

(3) 「Vitalityによる生命保険DXの取組みと大学教育への期待」では、健康状態を把握し、健康状態を改善することでポイント化されて特典が受けられ、保険料が変動することで、顧客が健康になり、保険金の支払も最大3割減ることを見込んでいる。Vitalityのプログラムでは、健康診断書や歩数のデータなどにより、ライフサイクルデータが蓄積され、因果関係の分析している。例えば、データの利用から、運動するとコロナの重症化が防げるのかという研究の事例もある。また、慶應義塾大学 FinTEK センターでデータサイエンス講座を提供しており、ダミーデータによるPythonの予測モデルの作成などの講義を実施しており、産学連携の取組みを今後も継続したいとの紹介があった。

#### 【グローバル人材の育成：学生主体の柔軟な学びの環境を考える】

(4) 「学びの自由度、国際通用性が求められる場としての遠隔海外連携授業」では、教育の立場からは、視野を広げて人の成長に資する教育環境を如何に構築するかに議論の主題が変わってきており、対面授業の補完ではなく、オンライン教育を選択するフェーズへ変化してきている。一方、学ぶ立場からは、受講場所の自由度が生まれ、時間的な制約の解放に歓迎の声も聞かれ、授業アンケートでは過半数の満足度が得られている。平成24年の中教審では、思考力、表現力を引き出す教育の重要性が提言されているが、これに加え、学生自身で学びをデザインする力を発揮することが重要と考える。大学ではこの順番に学べばよい、という枠組みに従った教育が実施されているが、社会に出てその枠が取り払われたとき、創造的な活動を求めても無理ではないか。遠隔授業の効用として重要である。他方、海外と連携した遠隔授業では、教育の国際通用性が問われる。

授業の内容、授業のレベル、ディスカッションのレベル、言語能力のレベルが世界の評価をリアルタイムに受け、比較評価が生まれることを覚悟する必要がある。COIL 型授業では、授業のぶつかり合いに外ならないので、教員は自分自身の授業をさらすことになる。そのことから、海外大学との比較の中で検証する機会にもなる。そのようなことから、授業の国際通用性は大学教育の新しい評価指標になっていくと思われることが強調された。

【教育 DX に向けた学びのプラットフォーム作りの取り組み】

- (5) 「LMS で繋がる学修環境の再構築・キャリア支援とスマートキャンパス構想」では、2018 年度から BYOD(Bring Your Own Device)を推奨し、どこでも関大 LMS にアクセスすることで学生の主体的能動的な学修時間を実質的に増加させることを目的とした。情報処理教室の PC の更新にかかる多額の費用をソフトウェアの拡充などに充て、アクティブ・ラーニングに対応した部屋に改変した。さらに、学びの可視化の取り組みとして、クラウド型動画プラットフォーム「Panopto」を全学導入し、オンデマンド授業、反転授業、配慮学生への動画撮影など学びやすい環境を実現し、視聴ログから教育効果の測定(ラーニングアナリティクス)により学修成果の可視化につなげている。また、国際教育を前提とした DX の試みとして COIL 授業によりボーダレス、インタラクティブ、インクルーシブを実現する環境を創出している。全キャンパスにグローバルスマートクラスルームをオンラインで他の教室に繋ぐシステムを導入し、対面授業をつなぐことにした。コロナが収束してもオンライン授業がなくなることはなく、元に戻らないであろうと考えていることが紹介された。

【起業教育に対する国の支援と今後の取り組み】

- (6) 「アントレプレナーシップ教育と大学発スタートアップ創出に向けた支援について」では、生産年齢人口の急激な減少、産業構造が一変し、人々に求められる素養も変化している中で、夢を持ち、国や社会を変えられると思う人材が育っていないことから、学び直し、アントレプレナーシップ教育が必要となってきた。外国と比べスタートアップが成長していくエコシステムが不十分で教育の状況が低いという課題がある。そのような背景から、「スタートアップ・エコシステムと形成に向けた基本方針」が令和 2 年に出され、今後 3 年間で集中期間とし、文部科学省では「創出」段階のアントレプレナーシップ教育を考えている。文科省の施策として「大学発新産業創出プログラム START」では、一つは自治体・産業界と連携して大学における実践的なアントレプレナーシップ教育、GAP ファンドを含めた一体的な企業支援体制の構築支援、初等・中等教育段階からのアントレプレナーシップ教育の推進と、もう一つは個々の大学で特筆すべき取り組みを支援するプロジェクト推進型などで、研究者の技術シーズを事業プロモータが事業化に向けていく起業実証支援を進めていることが報告された。

2. テーマ別意見交流で確認された主な内容

【分科会 A：学修者本位の教育、学びの質向上を目指す DX の試み】

- (1) 神戸大学の「LMS の高度化と学修データ統合システムによる学修者本位の教育の実現」では、LMS の高度化、教室のスマート化基盤整備、学修データ一元管理、AI 等を用いた学修分析と可視化の取り組みが紹介された。特に、LMS の高度化では、学修課程のログ分析を行い、学修に対するフィードバックや教材改善に資料につなげることができた。今後は、質の高いハイブリッド授業や AI を活用した分析を進め、エビデンスに基づいた教育・学修改善を進めていることが確認された。
- (2) 山口大学の「ジブンの学びをデザインできる AI 支援型 LMS の実現」では、授業科目レベルで学修の習熟度を学生が自ら確認できるシステムを設計し、学生個人に最適な学びを提供する取り組みを進めている。LMS に蓄積したデータを AI で解析し、学生個人のパーソナリティに応じた評価を可能にして、学生が自分自身で学修を推進することで、学生個人に合った目標設定の支援を目指している。今後は、学生によるミュレーションによる最適な学修アドバイスを提供する仕組みの導入などを検討していることが確認された。
- (3) 女子栄養大学の「DX を活用したテラーメイド教育の試み」では、学内に散在する多くのデータを統合データベースシステムで連結させ、教職員が一体となってデータを可視化し、学生にフィードバックすることで学生一人ひとりに最適な学びを目指している。今後は、AI を活用して、卒業時の目標に対してどの位置にいるか、何時間の学修が必要かなど、数値化・可視化して提案できる取り組みを進めていることが確認された。
- (4) 獨協医科大学の「データ一元管理と AI 解析による学修の最適化と無限学習の試み」では、大容量のデータ通信をストレスなく使用できる環境構築、XR、ロボット等を用いた教育とデジタルサポート体制の整備、データ一元管理と AI 解析による学修の最適

化、無限学習の試みを取組む中で、教職員間で育成したい学生像や教育を話し合う機会が増え、各部署の課題の可視化につながったなどの成果が確認された。

- (5) 福岡工業大学の「DXで教育・研究・働き方を高度化し、教育効果の最大化を目指す試み」では、学園全体で「デジタル化、データ」と「人、組織」が有機的に機能することを真のDXと考え、教職員一人ひとりが自分事として動いた結果の積み重ねによる「教育効果の最大化」に向け、学生BYODの重視、学修支援システムと学習ポートフォリオを組み合わせたシステムを中核に構成し、学生との双方向性を確保している。これにe-learningシステム、スマホ出欠管理システム、授業動画配信システムで利便性を高め、あらゆる授業形態に対応していることが確認された。

【分科会B：コロナ禍での学生のメンタルヘルスを考える】

- (1) 秋田大学の「こころとからだの健康調査1割以上うつ症状」では、メンタルヘルスケアの調査結果から、コロナ禍で中等度以上のうつ傾向が推測される学生が10%を越えていることが分かった。そこで、ハイリスクな学生に学生支援課から連絡をとり、学生を自殺ゲートキーパーに養成する活動により、精神衛生向上とリスクの軽減を期待している。また、学生による学生のためのメンタルディスタンス動画(48分)を作り、効果検証しており、全国に無料使用できる準備などの取組みが紹介された。
- (2) 昭和女子大学の「コロナ禍における心のケア、7つのコツ」では、ストレス反応を重症化させないため「コロナ・ストレスを乗り切るための7つのポイント」をまとめた。内容は、「正しい情報を知り、実行する」、「こんなとき、心が乱れるのは自然なこと」、「自分のストレス反応を知る」などが紹介され、コツを使いストレスが成長につながるよう、プラスの面が芽生える取組みが紹介された。
- (3) 広島大学の「スマホでセルフチェックみらい健康手帳の利用」では、コロナ禍のメンタルヘルス支援として、入学時のメンタルチェックでハイリスク学生、欠席多・成績不良学生の調査を行い効果があったが、より早い段階で学生が自己のメンタルヘルス状態を認知できるよう、スマホアプリの未来健康手帳を開発し、早期の介入や相談で援助希求行動を高め、メンタルヘルスリテラシーの向上を目指していることが紹介された。
- (4) 甲南大学の「コロナ禍、ハイブリッドによる学生相談の心の支援と課題」では、対面形式だけでなく、オンライン形式の活用も進み、相談へのアクセス向上や感染の防止につながった。デジタルネイティブ学生の心の成長を促すには、青年期の3密(濃密・親密・秘密のある人間関係)が重要で、学生相談機関だけでなく、全学的支援の教職協働体制の強化が必須になってきたことが紹介された。
- (5) 山梨県立大学の「県大ほっとカフェの状況と展望～コロナ禍における学生支援」では、コロナ禍で「本来あるはずだったキャンパスライフの喪失」が起こり、学生の孤立が危惧される状況になったことから、学生が気軽にコミュニケーションを図る場の「県大穂っとカフェ」を立ち上げ、オンライン座談会、対面・オンライン併用イベントの開催を進めた。今後は他部署や教員を巻き込んで、学生の安心感の創出や心の拠り所の場づくりに向けた活動を継続していくことが紹介された。

【分科会C：質向上を目指すオンライン授業、ハイブリッド授業】

- (1) 立命館大学の「ハイフレックス+ライブ授業収録(VOD)の全部盛り授業」では、対面授業をZoomでライブ配信するハイフレックスに加えて、ライブ配信を収録したビデオオンデマンドの形で提供・公開する3つを合せたもので、15回授業全てではなく、9回以降の授業の半分を充てている。授業の課題は、授業に参加しているような視点の確保と発言に抵抗があることから話しかけする工夫、VODの学生には同時性がないので対面授業とライブ授業の学生全員に掲示板でディスカッションする、VODの学生はSNSで学生同士が交流するという工夫が必要なことが確認された。
- (2) 名古屋学院大学の「オンラインも対面もTeamsとLMSで反転授業」では、100名以上が履修する経済専門科目での反転授業の仕組みが紹介された。予習パートでは、学生が確実に予習するよう4種類のデジタル教材(5分の解説ビデオ、エクセルの実習、PDFテキストの関連問題、択一式クイズ15問)により課題を課し、平常点に加点している。また、前回の問題でつまづいている点を解説し、小テストで確認する。授業パートでは、小テストで間違いの多い設問を補足説明し、LMSで4択の授業理解度調査、応用課題のミニツッペーパーを提出させている。対面では学生相互の教え合いを推奨している。期末試験において最頻値のモードが30点以上、上振れしたなどの結果が確認された。
- (3) 昭和大学の「ICT活用による分野横断型実験授業の試み」では、問題解決力や連携力

の養成を目的に、7分野の学生が2グループでテレビ会議とSNSで意見交換する分野連携型授業を2段階で実施した。第一段階では、2年生を対象に「多職種の役割を知る」を目的に授業ビデオをもとにプロムレムマップ化する。第二段階では、4.5年生を対象に「健康長寿社会の実現のために他分野がどのように連携すべきかを考える」を目的に問題発見から問題解決のプロセスを踏んで行った。学生の感想・意見では、他学部との共同は刺激的で広く深い知識が得られた、自分の専門性を伝えることの難しさを改めて知ったなどであった。授業設計では、自分野の立場で実体験を説明する時間の確保、7分野の教員によるコメント、ファシリテーションの確保が重要であること。成果としては、広い視野で医療・健康生活を考えることができ、他分野の役割を知り、多職種と連携し、社会の問題に対応・解決する経験ができたことが確認された。

#### 【分科会 D：スタートアップ教育を考える】

- (1) 崇城大学の「講義と課外活動を連動させたアントレプレナーシップ育成支援」では、2020年度から卒業時に会社・公務員に加え、起業も選択できるスキルを身に付ける「アントレプレナーシップ教育プログラム」に更新し、「創造性」に「個性」を融合した「独創性」を確立する教育の実践によって、「常識にとらわれない思考力」「課題を解決に導くチームメイキング」「情熱を持ち続けるセルフマネジメント」を有する学生の育成を目指しており、講義と大学が設けた課外活動(「起業部」)で実施している。講義は、1年前期にマインドセットによる「考え方」を身に付け、後期にビジネスプランコンテスト挑戦を課している。2年次に「創造性」を発揮できるスキルの「企画提案力」を目指し、3年次に専門領域に向かわせる。課外活動は、起業部の学生が、テーマ探索、プロジェクト設計、実証実験・学内ビジネスプランコンテスト、最終報告を通じて、実際のフィールドワーク、成長体験の検証を行う。これらの活動を通して、学内出資会社「SOJO-スタートアップラボ」から、出資を得て起業した事例が誕生している。大学としては、学内にあってサポートが受けられ、成功確率の高いビジネスが提案できることと、将来の選択肢を狭めないようセーフティネット体制をとっていることが確認された。
- (2) 日本工業大学の「授業とビジネスプランコンテストによる起業教育」では、1・2年生対象の「創業の基礎」と3年生前期の授業「企業とビジネスプラン」の期末レポートがビジネスプランコンテストのエントリーを兼ねており、一次審査で個人20件、二次審査で8件が夏期休暇中に個別指導を受け、10月末の最終審査会に臨んでいる。授業の目的は、起業人材の輩出ではなく、企業のイノベーション、第二創業を支える人材育成を目標とし、就職・起業を目指す双方に役立つ授業としており、「起業スキル」と「起業家精神」の獲得を目指している。モチベーションとマインドの定着を図るため、前回授業でのいいレポートを表彰する、毎回Google Formでアンケートをグラフ化して、学生の意見が授業に取り入れられるようにする、毎回実際のビジネスプランの先輩に来てもらい発表する等、飽きない授業を工夫している。学生の授業評価は、正解追求型はないこと、学生個人々人へのフィードバックが多いことなど非常に高いが、ビジネスプランコンテストにエントリーしない学生も多いことが確認された。
- (3) 山形大学の「地域活性化を体現する次世代アントレプレナーの育成」では、アントレプレナーシップの定義を、起業に限らず新事業創出や社会課題解決に向け、新たな価値創造に取り組む姿勢や発想・能力等(起業家的行動能力)としており、5大学連携の育成事業を展開している。このプログラムの特徴は、中・高生、大学・大学院生、社会人、教員・研究者、起業家までを対象とし、主として企業から運営資金(受講料、協賛、寄付)を得ている。大学生・社会人には、山形大学の「起業家人材育成プログラム」とコロナビジネススクールのProgramをジョイントした「新事業創出イノベーションプログラム」を開講している。山形大学単体ではなく、行政、企業、金融、報道等各機関の協力と支援、他大学・海外大学との連携によって、ベンチャー企業が持続的に創出されるエコシステム構築を図っていることが確認された。

#### 【分科会 E：国際連携協働学習(COIL)】

- (1) 関西大学の「ICT活用によるポストコロナ禍期のCOIL教育実践」では、アクティブ・ラーニングを促すグループ活動のタスク設計をコラボレーションタスクとして行う教育実践で、ICTを活用して海外大学との連携を基本とした国際連携協働学習を展開している。2021年のプログラムでは、総勢200名以上の学生の応募があり、合計で約80人の学生を11の国と地域から受け入れた。ポストコロナ禍期の展開では、誰もが参加しやすく、グローバルな学びを日本人学生にも他の学生にも提供できるようになった。関西大学では、教育のDXとして、global smart classroomを設け、一緒に快適にインタラクティブにグループワークすることを可能にしておき、必然的にCOIL/virtual Exchangeをはじめとしたデジタル技術を駆使した国際教育の方法論は、もっと進化しなければならないと考えていることが確認された。

(2) 静岡県立大学の「COILによる看護教育の事例紹介」では、上智大学と協働して、コンケン大学、ドルノゴビ医科大学の看護学部と COIL を実施している。事前課題として自己紹介、大学紹介動画の作成を行い、それを事前に共有した上で、看護学生自身の健康をテーマに各国の学生がそれぞれの大学生活、日常生活で健康にまつわることをどのような点に気を付けているかを、英語でスライドを使ってプレゼンし、最後に質疑応答、ディスカッションを行う。学生の反応は、文化を尊重した看護実践の重要性への気づき、海外の学生との悩みの共有、よりグローバルな視点が芽生えた。教育実践の調整には、相当の労力を有し、国際交流センターの協力を得て実施していることが確認された。

(3) 南山大学の「グローバル人材教育としての COIL 型授業の活用」では、多文化共生力、学際的国際力、問題発見・解決力で、Career Oriented Interactive Leadership という、グローバルマインドを持った国際人を育成する Nanzan University COIL プログラムを実施している。3つのステップで、「ベーシック COIL」では言語と文化の交流、「アカデミック COIL」では専門分野をベースに議論、「PBL COIL」では企業・団体・官公庁の課題を両国の学生がコラボして解決策を考えプレゼンし、フィードバックを受ける。例えば、PBL COIL はサマープログラム、インバウンドプログラムをアニメ・漫画で提案する課題を提示し、南山大学と UMBC、Maryland 大学の学生 9 人程度で、情報収集、アメリカの学生とアメリカに有効なプロモーション方法の議論、ショートプロモーションのイメージムービーを作成し、提案に対して評価を受ける COIL を 7 週間実施した。COIL は、留学とは違う次元の国際交流、国際プロジェクトの意味で非常に有用なツールであることが確認された。

#### 【分科会 F：著作権法改正に伴う権利処理の注意点と補償金制度】

(1) 「授業コンテンツの権利許諾範囲と補償金の分配」では、大学などの教育機関が補償金を SARTRAS へ支払うことで、第三者著作物を授業内利用・同時授業公衆送信・異時授業公衆送信することが自由化された。一方、機関管理・経年利用・共同利用は、補償金ではなく、教育機関と権利者の間でライセンス契約を締結する必要がある。権利者への補償金分配の仕組みは、SARTRAS が各大学に対し著作物の使用状況をサンプリング調査のデータを分配業務受託団体から分配している。小規模の業者や個人的な Web サイトにコンテンツを公開している権利者の場合、分配業務受託団体を設立することが困難で補償金支払いの対象とはならず、権利者の新団体設立も今後の課題となっている。また、権利処理の注意点として、著作権対象の著作物となるかどうか、同一性保持権の改変と訂正の見分け方など、授業内での第三者著作物の使用で留意しておくべきことについて、理解の共有が行われた。

#### 【分科会 G：授業改善とラーニングアナリティクス(LA)】

(1) 京都大学の「ラーニングアナリティクスとは？」では、情報の技術を用いて教員や学生からどのような情報を獲得し、どのように分析・フィードバックすれば、どのような学修・教育の効果があるかを研究している。京都大学が開発しているデジタル教材配信システム(BookRoll)では、PDF を登録し Web ブラウザで閲覧、ページ遷移、マーカー、メモなど学生利用のログデータが蓄積され、ログパレットの分析ツールで分析できる。例えば、英単語の分からない部分をマーカーで印をつけることで学生が分かりにくい単語を抽出できる。また、手書きでは手が止まって書くのに時間がかかっているという解答プロセスを記録でき、タイムラグなく間違いや分かりにくい箇所が見つかるようなっているなどの取り組みが紹介された。

(2) 東京学芸大学の「eポートフォリオとしての学習データとラーニングアナリティクス」では、ログと学習記録の「学びの記録 e ポートフォリオ」を使い、どのように学修者中心の教育を作っていくか。学習者による「主体的／自律的学び」が土台で、受け身の学生には役に立たない。学習・学生生活のダッシュボード、教務システム、図書館、教育実習などを表示させるダッシュボードを開発した。例えば、「eポートフォリオ・コンテナ」ではレポートを蓄積し、自己評価のグラフ、相互評価結果がレーダーチャート化され、学修者は自分を改善していくことができる。LA の開発に手が届かない大学でも、既存の LMS をラーニングアナリティクスと同じ構造として捉えてやると、使っていくことができるのが紹介された。

(3) 九州大学の「大学教育における学習分析の活用事例」では、学修分析を原動力に、学修者の事前事後学習、弱点発見・克服、最終的には学修者自身がデータを振り返り、意欲向上に繋げるという学修エコシステムの構想がある。学修者が今どのページを見ているかリアルタイムで集め可視化するヒートマップにより、授業が順調か、説明不足かわかる。学生にも公開すると、学生は他の学生が何を見ているのかわかるようになり、ページ上にアクションをより残すようになっている。また、学生同士が教え合える環境として、お薦めの記事を返す仕組み Teaching bot システムの研究・開発、教材の自動

要約、小テストの分析から必要な復習教材を紹介するなど、テラーメイドな支援で少し足場を作ることにより学修成果が得られることが確認された。

#### 【分科会 H：データ活用能力育成に向けた授業実践の紹介】

本協会の情報活用能力育成のガイドラインに基づき、高校で必修となった「情報 1」との接続を受けて、大学の初年次教育からの学士課程での一貫した授業実践例として、江戸川大学での問題解決能力を育成するカリキュラムの構成と導入授業例、私情協のモデル授業を踏まえた初年次及び 3 年次のプログラミング教育、AI 活用を含めた STEAM 教育及び高大接続、数理基礎力に不安のある文系大学におけるデータサイエンス教育の試みが報告された。次いで、情報活用教育を改善し、質向上を図るための「情報活用教育コンソーシアム」での意見交流活動、コンソーシアムに掲載の初年次向け反転授業を導入したビデオ授業ガイド、専門専門科目との連携を図るモデル授業のシナリオなどの紹介が行われ、全体討議を行ったところ、文系学部でプログラミング教育を全学的に進めるカリキュラムの在り方や、高校でのプログラミング履修が足りていない学生へのフォローとして、例えば、私情協でプログラミングのオンデマンド教材を作成し、提供する可能性の検討、理解が低い学生に対してオンライン又はオンデマンドで TA・SA による助言を行うなどの意見交流が行われた。

#### 【分科会 I：オンライン授業の学修評価と試験方法】

- (1) 関西大学の「振り返りとフィードバックによる学びと成長の一体的推進～形成的評価の実践例」では、学修意欲を高めるにはフィードバックが大事で、回数が多いほど、対面でも遠隔でも、学びの充実度が高まった。フィードバックの方法としては、授業が終わるときに学生から ICT を使って振り返りのコメントを提出させており、そこからベストコメントなどを紹介している。振り返りとフィードバック実践の効果として、学生の感想から「感想を書くことで、授業内容を思い出し、その時自分が考えたこと、思ったことを文字にすることで、復習にも繋がり、授業を受けて終わりになってしまう事も減ると分かりました」などの効果が見られた。さらに、振り返りとフィードバックの効果を高める方法として、安心して他の学生同士で議論ができる、自分の感想・コメントを思い切って振り返りに書ける、といった状態を作るようにしている。心理的安全性が高まることは、行動的なエンゲージメントにつながり、それが学習成果の獲得化につながることを確認された。
- (2) 専修大学の「LMS 依存の試験とアンケートフォーム型試験への試み」では、遠隔監視におけるビデオを利用した紙面筆記型試験の方法では、解答を紙に書かせてビデオ会議で監視をする方法で、机の上や壁などをスマートフォンで撮影写させてから、手元を映しながら答えさせ、写真でファイルを提出させた。自宅などからのフォーム型のオンラインテストの方法では、Google Form 用のタイマー起動アドオンである Quilgo アドオンを利用し、タイマーとしてのオンデマンド受験ができるほかに、一斉受験が可能となる。監視の面では、カメラによる顔監視、PC スクリーンでの監視が可能で、選択肢をランダムに配置することもできる。これらのカメラ監視やスクリーン監視は、受講生の理解が欠かせないので、必要最低限の場合に留めることの大切さが紹介された。

#### 【分科会 J：データサイエンス・AI 人材育成の支援】

- (1) 大阪公立大学の「文系大学生向けデータサイエンス・AI 授業の実践事例」では、データビジュアライゼーション、テキストマイニング、画像処理のダッシュボードの活用が紹介された。データビジュアライゼーションでは、リンク先を貼り込んで学生に見せることでダッシュボードが時系列でどのように変化しているかを考えさせる。ジョンズ・ホプキング大学において全世界の COVID-19 感染状況やなどのデータは Excel ファイル、PDF、CSV ファイル等でダウンロードして活用できる。回帰分析や、特に直線回帰のところ差し込んでいくと、学生は最後まで見てくれている。テキストマイニングは、オリンピックの記事などを DeepL で訳し、もう一度 DeepL の中で日本語に戻して比較すると、可逆的な出力になっていないことが分かる。AI を使って訳すときは自分も頭を相当使わないとうまくいかないことが多いことを体験することで、統計についても理解しようとなる。画像処理は、テキストを入れて見合った画像を出力する Gakyo などを通して、どのような文書をいれると思うような画像になるかを考えさせると結構面白い。15 回をドロップアウトさせずに、マイナスイメージをプラスにしていけることが教員側としては大切なことが紹介された。

3. 3 日目は、43 件の教育改善を目的とした ICT 利活用の発表が行われた。

4. 参加者アンケートの感想・意見の一部を以下に紹介する。

#### (1) 全体会について

- ・ ニューノーマルがもたらした教育 DX 化の様々な事例を拝聴でき、有意義だった。



- ・ DX が今後教育に与える影響を深く知ることができ非常に有意義な研修となった。
  - ・ 安西先生の学びの基本項目や認知バイアスから脱却するスキルを学ぶ等、思考や言葉の力を付けるなど、気づきを生み出しやすい項目で参考になった。
- (2) 分科会について
- ・ コロナ禍での学生のメンタルヘルスは、多くの大学が経験のない授業運営にあたり、学生に及ぼすメンタルへの取組みが具体的で参考になった。
  - ・ スタートアップ教育と著作権の補償制度のどちらも今後に注目したい分野です。
  - ・ アントプレナiership教育のいずれの発表も、予測不能な時代の先陣を切った内容に思えた。
  - ・ 学修評価の振り返りとフィードバックによる学びと成長の一体的推進は、興味深く改めて教員が学生と向き合うことを考えさせられた。
  - ・ 文系学生に対する情報科目の教育は、小中高の情報カリキュラムが変わり、大学にその世代が入学してくる中で、大学としてどうあるべきか今後も注視したい。
  - ・ データサイエンス授業でテキストマイニング事例、翻訳機能、アート分析などを扱うことで、学生が興味を持ち気づきにつながる教材を取入れた講義に興味を持った。
  - ・ データ一元管理と AI 解析による学修の最適化は、教職員ではケアしきれないビッグデータを利用した非常に効率的なシステムであると感じた。
  - ・ ラーニングアナリティクスでは、私も学修者の成長を一番に考えて授業実践していきたいと考えているので非常に共感した。
- (3) 発表会について
- ・ 多くの大学で LMS の導入やデータサイエンス教育など ICT 活用に取り組んでいる状況を理解することができた。
  - ・ メタバースを実践している発表にとっても興味があった。
  - ・ ビジネススキルを高める取組みやデータサイエンス教育の事例が参考になった。
  - ・ 私大文系大学の数理・データサイエンス・AI 教育について、全学必修化を踏まえた試みで、データサイエンス必修化に各学部の足並みが揃わないことが問題点として語られ、非常に考えさせられる話だった。
  - ・ 同一時間で聞けない部分を動画配信いただけてありがたい。
- (4) 大学・企業による ICT 導入・活用事例紹介ビデオについて
- ・ いろいろ発表をまとめられ、詳しくされていたので、よくわかり良かった。
  - ・ ループリックなどの活用事例紹介が参考になった。
  - ・ お昼時間に流す内容として、適切な量と質であった。
- (5) 今後希望するテーマについて
- ・ 最近メンタル的に課題をもった学生の入学が多くなっており、その学生への対処をテーマとして扱ってほしい。
  - ・ 著作権関連は、数年に一度は 2 時間講演を希望します。
  - ・ 出口教育(就職や社会性)の進め方と事例報告。
  - ・ 他分野教育の実践事例を伺えることが意外に勉強になっており。例えば、医療系で伝統的に行われている教育方法を工学などに導入した成功事例など、教育方法の新しい創出などをテーマとして希望します。
  - ・ もう少し時間的な余裕を持たせて、それぞれのセッションが構成されているとありがたいと思います。
  - ・ 業務でリアルタイム視聴できないこともあり、録画視聴が助かり、平日視聴が難しいことから来年度も週末を含めた視聴期間だと助かります。
  - ・ 資料は PDF のみで構いませんので、申し込み時に冊子資料の要不要を選択できるようにしてもよいのではないかと感じた。

なお、開催結果の詳細は、巻末の 2022 年度事業報告書の附属明細書【2-6】を参照されたい。

## 5-2-2 短期大学教育改革 ICT 戦略会議

### <事業計画>

短期大学生の社会人基礎力の強化、短期大学のプレゼンス向上を促進する事業として、複数の短期大学と自治体等が協働する地域貢献支援活動のコンソーシアムをネット上に形成し、教育による「高齢者との交流促進・課題解決策の支援事業」、「地域価値発見の支援事業」のモデルを探求するため、コンソーシアムによる試行事業の経験を積み重ね、事例の拡大を図る。そのために「短期大学教育改革 ICT 戦略会議」は休止する。

### <事業の実施状況>

「短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会」に加えて、地域貢献支援活動のコンソーシアム校の協力を得て教育による地域貢献活動を試行した。以下に、委員会の活動状況について報告する。

#### 短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会

令和4年5月20日、8月9日、9月15日、11月4日、令和5年3月18日に運営委員及び短期大学地域貢献支援活動コンソーシアム参加教員の平均10名が出席して5回開催し、短期大学コンソーシアムによる試行事業の実施とコンソーシアムサイトの整備、次年度への対応を検討した。

#### (1) 短期大学コンソーシアムによる試行事業の実施

コンソーシアム活動を複数の短期大学間で協力して行う「学びの協同化」を中心に進めることになり、以下の通り「高齢者支援事業」、「地域価値支援事業」の試行授業を実施した。

#### 【高齢者支援事業】

**経緯** 学生が主体となって進める社会実践の訓練として、課外授業として「高齢者支援事業」の試行を目指すことになったが、学生側に高齢者との対話経験がないことから、対話の仕方などを学ぶために、短期大学の学生、社会人及び高齢者グループの方々などと、ネット上で交流の経験を積み重ねることになり、2年前から実践女子大学短期大学部と山野美容芸術短期大学で「異世代交流支援事業」をはじめた。

**概要** 前期に動画編集方法を5回にわたって専門家から学び、そこで習得した技能を生かして、後期に高齢者をキャンパスに招いて対面で交流し、あらかじめ学生が考えた内容でインタビューを行い、それを録画・編集し、作品を制作した。動画作品は YouTube に公開した後、再び高齢者と Zoom で交流する機会を設け、高齢者から動画についての感想を受けた。

**ノウハウ** 前期に動画編集方法を実践女子大学短期大学部の学生が対面で受けた講座の様子を撮影・編集して YouTube に限定公開し、山野美容芸術短期大学の学生がオンデマンドで動画編集の方法を学んだ。両校の学生は各自が制作した友人紹介の動画をクラウド上に保存して、プロの専門家からコメントを受ける機会を設けた。

後期10月のインタビューの動画制作は、前期に動画作りの基礎を受けていない学生数名の補習を行い、両校全員基礎知識を共有した上で、専門家よりインタビュー動画の説明を受けた。その上でインタビューの内容をグループで考え、高齢者へのインタビューを6グループに別れ(高齢者1名ずつ参加)で撮影した。なお、11月の高齢者との交流までの間 Zoom で専門家のアドバイスを受けた。こように対面の他にオンデマンド、オンライン、クラウドを組み合わせることで活動を実施することができた。

**成果** 参加学生は、動画制作をプロから学ぶ機会を通して、高齢者との交流だけではなく、動画制作の技術、インタビューのコツなども習得でき、企画力・協調性・時間管理能力・発信力・ITスキル・コミュニケーション力などの社会人基礎力の向上につながった。ICTに長け、活発な活動を行っている高齢者の2団体(「baba lab」、「地域デビュー楽しみ隊」と)とのつながりを強めることができ、学生・高齢者双方が刺激し合う様子がみられた。

**展望** 学生がそれぞれの専門分野を生かして高齢者と対話しながらニーズ調査を行い、課題解決のサポートができるよう、これまでの活動をさらに進化させていく予定にしている。

## 活動の詳細

### ① 参加人数と活動状況

**前期**：実践短期大学の学生 6名（教室で対面講座参加）  
山野短期大学の学生 15名（自宅でオンデマンド受講、実践の講座録画を使用）

プロに学ぶインタビュー動画作りの講座（各回授業後の15:00から16:00に実施）

- \* 第1回(5月23日)：ペアになって相手の自己PR映像(3分程度)を撮影・編集
- \* 第2回(5月30日)：インタビュー映像「あなたにとってのコロナ禍」(3分)を作る。3人グループで質問内容を検討する。
- \* 第3回(6月6日)：撮影素材の文字起こし、使用部分の検討・構成を修正する。
- \* 第4回(6月13日)：編集を行いZoomで個別に講師のプレビューを受ける。テロップやBGMをつけて完成する。
- \* 第5回(6月20日)：発表、振り返りを行う。
- \* 山野学生向け動画づくり講座(7月9日)：山野の学生 21名

**後期**：実践短期大学の学生 6名  
山野短期大学の学生 15名  
高齢者 6名

対面で高齢者インタビュー、インタビュー動画をYouTube公開、Zoomミーティング

- \* 第1回(10月1日)土曜日  
10:00-13:00(3時間)：前期に動画作りの基礎を受けていない学生数名の補習  
14:00-14:30(1時間半)：インタビュー動画について専門家より説明を受ける。  
14:30-15:00(30分)：インタビューの内容をグループで考える。  
15:00-16:00(1時間)：高齢者へのインタビューを6グループ(高齢者1名ずつ参加)で撮影し、交流する。
- \* 第2回(11月21日)：インタビュー映像(3分)について高齢者との意見交換と交流を行う。

### ② 参加学生から寄せられた特徴的な感想(抜粋)

<活動に参加してよかった点・活動を通して学んだこと>

- \* インタビューという貴重な経験をさせていただいたこと、異世代の方とコミュニケーションをとれたことです。本当に楽しかったです。
- \* 普段あまり関わらない高齢者の方々と交流できて色々な考え方に触れらることができて自分の学びになりました。
- \* 話したことがなかった学生とグループが一緒になって話す機会も増えたとし、異世代の方と交流することで、世代間での考え方の違いについて理解することができ、コミュニティを広げるきっかけにもなったので良かったです。
- \* インタビューをする際に若者言葉のようなものを使いそうになってしまったので、世代の違う方と話す時は分かる言葉を意識して使うことが大切だと思いました。また、コミュニケーションの楽しさを改めて学びました。
- \* この活動に参加していなければ学ぶことが出来なかった、マイクの付け方やカメラの置く位置、編集の仕方などを学ぶことが出来たのが良かったです。
- \* 動画にしたときに気にならないマイクの付け方やインタビューのカメラの配置などを新しく学ぶことが出来ました。一つの音源しか使ってはいけないと思っていたけれど、質問や雰囲気によって音源を変えるとより良くなるという事や、文字を出すタイミングについてアドバイスだけしたりして、学べることが沢山ありました。

<活動を通して成長できたこと>

- \* 活動を通じて、積極的に自分の役割を果たすことができるようになってきたと思います。これを今するべきかもしれないと考え、自分の役割を果たしました。
- \* 異世代の方との交流を経て、世代が違っても自分は今にもコミュニケーションをとることが出来るのだなということを知るきっかけにもなって、もっともっとコミュニティを広げていきたいなと感じました。

### ③ 参加高齢者から寄せられた特徴的な感想(抜粋)

<学生の動画を見た感想>

- \* どの動画もよくまとまっており、音楽の使い方も絶妙で、編集レベルが高いと思いました。さすがデジタルネイティブ世代は違うなと感心致しました。もちろん指導された講師の

方のレベルが高かったからこそと思います。  
＜今回の活動に参加しての感想＞

- \* 今回若い学生さんと話す機会に恵まれても新鮮でしたし、楽しかったです。3人の学生さんと話しましたが、お互いにお年寄りは、若者は・・・という先入観があったかもしれませんが、多様性が声高に言われる昨今、外国人だけでなく、同じ日本人でも異世代交流・異世代相互理解は必要だと思います。是非、このような機会をもっともっと作って欲しいと思います。また、何かありましたらいつでもお手伝いいたします。
- \* インタビューでは最初に渋谷でのエピソードから始まり、いろいろと活動している現在の生活の過ごし方になりました。お話ししている内に、今の自分は学生時代の再現ではないかと思いました。暗い高校時代から大学入って弾けました。クラス、ゼミ、サークル、海外一人旅から多くの人との出会いがあり、人を介していろいろと活動の幅が広がりました。光り輝いていた当時は思い出し、今の自分は、学生時代が原点だったこと思い出すキッカケとなりました。自分の人生の振り返りの時間をいただいたことに、改めて感謝申し上げます。年末には自宅で学生さんの作成してくれたYouTube動画を鑑賞し、これまでの人生の振り返りをすることができました。また、今後企画がありましたら、参加したいと思います。

#### ④ まとめ

- \* 短期大学生の課外活動時間の確保が難しい中、両校の学生、高齢者という3者をつなぎ、動画制作の専門家との調整も必要となるため、スケジューリングは困難を極めた。
- \* こうした困難を克服するため、対面の他にオンデマンド、オンライン、クラウドに画保存といった方法を組み合わせ、また動画をYouTube公開してあらかじめ視聴するなどの工夫を行った。
- \* 地域社会への貢献活動を継続していくには、一つの短期大学で完結するのではなく、複数の教育機関と異世代組織、自治体が連携することで、可能性がより一層広がっていくことを感じた。今後も大学間・異世代者間・自治体や民間団体の連携を強化し、SDGsの「パートナーシップで目標を達成しよう」の実現を目指すことにしている。

### 【地域価値発見支援事業】

**経緯** 2019年度より大阪夕陽丘学園短期大学として三重県志摩市に対して、地域価値発見支援事業を目指した取り組みとして、真珠に注目した「パールズコレクション」の支援を行ってきたが、真珠の需要は年々低下してきており、早急に新たな真珠の価値を見出す必要性が高まっていることに鑑み、2022年度に志学館大学(鹿児島県)、別府大学短期大学部(大分県)、大阪夕陽丘学園短期大学(大阪府)、和泉短期大学(神奈川県)からなるコンソーシアムを構成し、学びの協同化を通じて従来の流通に乗らない真珠や貝殻の新しい価値の発見に取り組むことで、地域価値の創生に繋げることを目指して、「真珠価値探求プロジェクト」を立ち上げた。

**概要** 本プロジェクトを通して地域コミュニティの基盤となる人材養成として、地域社会とどのようにかかわっていくべきかを短期大学生に体験させることで、「市民としての自分らしさ」を気づかせることにより、コミュニケーション力や社会人基礎力などの向上を期待した。3校による分野横断的な学びを通じて、学修成果を社会実装につなげる貴重な機会の提供と、社会の役に立ちたいという高い精神性・自由で豊かな感性・情報発信力などの学生力と教員の研究力、職員のマネジメント力を一体化することで、新たな「短期大学力」としての存在感を社会に強くアピールすることを目指した。

**ノウハウ** 活動は、3校の短期大学と1大学の支援でZoomにより2022年11月から2023年3月上旬にかけて6回に亘り、課外授業として実施した。初めての学生がネット上で交流できるよう1回目は「Zoomで繋がろう」からスタートした。2回目は「お互いを知ろう」、3回目は「アコヤ真珠および貝殻を調べてみよう」、4回目は「テーマを決めよう」というスケジュールで、各回午後6時から30分間とした。5回目の発表会は午後1時からの1時間、6回目の総括と「次年度に繋げよう」は1時からの45分間という短い時間の中で教員・学生による司会、6名の教員全員によるファシリテータの支援のもとで実施した。

活動方法は、各校とも毎回実施日の3日前までに説明スライドあるいは説明動画(10分以内)をGoogle Classroomに提出し、事前に各自で視聴しておき、Zoomでの意見交流に臨んだ。また、各回の後10日以内にGoogleフォームのアンケートに回答することで振り返りができるようにした。当日不参加者へのオンデマンド配信の提供もClassroomを利用した。

**成果** 4回のオンライン交流では、回を追うごとに各校とも他校のプレゼンテーションに刺激され、地域性や学科特性がブラッシュアップされた。その結果、大阪夕陽丘学園短期大学では他学科である製菓クリエイトコースの先生と共同したフランス菓子の制作、和泉短期大学では幼児保育目線でのマラカスや貝殻のペン立て制作から、真珠に親しむためのストラテジーの提示、別府大学短期大学部では地域特性を生かしたプレゼンテーションから温泉の素やチキン南蛮など地域に根差した作品の制作が行われた。

総括では、事前アンケートを基に各校が他校をリスペクトした意見が出され、分野横断的コミュニケーションを通じて、「学びの連鎖」や「学びの化学反応」などを示すことができた。

**展望** 今回のパイロット試行のノウハウを基盤として、全国の地域価値の創生に繋げることを目的としたい。また、各校の問題に対して問題解決型コンソーシアムを行うことや、物質を対象とした事案のみならず、少子化問題等の非物質に対しても取り組むことへと繋げることが期待できる。

**活動の詳細**

① 参加人数と活動状況

参加学生(全体 19名): 大阪夕陽丘学園短期大学(7名)  
和泉短期大学(5名)  
別府大学短期大学部(7名)

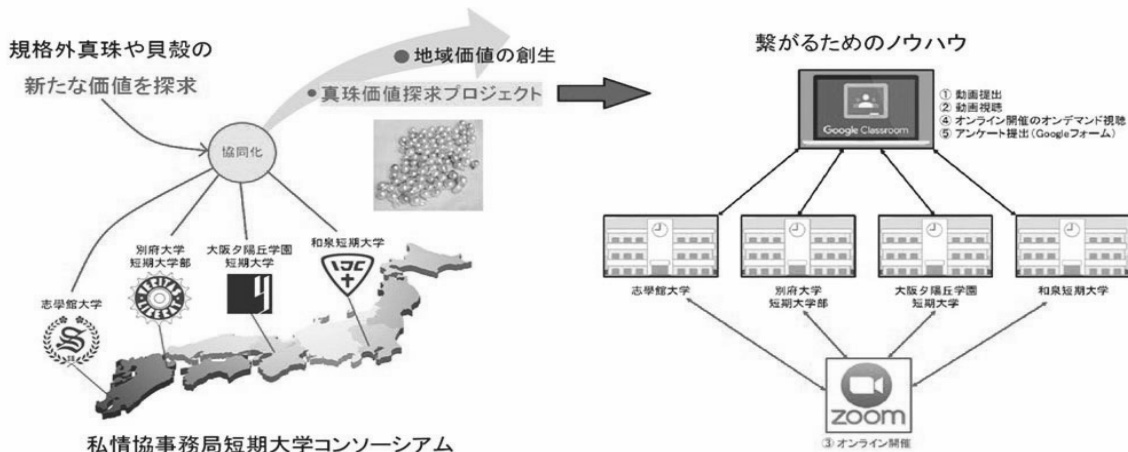
参加教員(6名) : ファシリテータ又は司会  
大重康雄(志学館大学)、治京玉記(大阪夕陽丘学園短期大学)  
後藤善友・衛藤大青(別府大学短期大学部)  
深町和哉・八代陽子(和泉短期大学)

- 1 回目の学生参加 : 13 名(内、オンデマンド参加 2 名)
- 2 回目の学生参加 : 10 名
- 3 回目の学生参加 : 12 名
- 4 回目の学生参加 : 10 名
- 5 回目の学生参加 : 12 名(内、オンデマンド参加 1 名)
- 6 回目の学生参加 : 6 名(内、オンデマンド参加 1 名)

2022年11月10日～2023年3月9日(全6回)

回数	開催日	テーマ	司会進行	ファシリテーター
1回目	11月10日*	オンライン(Zoom)で繋がろう!	大阪夕陽丘学園短期大学 治京	教員全員
2回目	12月15日*	お互いを知ろう!	大阪夕陽丘学園短期大学 学生さん	治京
3回目	1月12日*	アコヤ真珠および貝殻を調べてみよう!	和泉短期大学 学生さん	深町・八代先生
4回目	1月26日*	テーマを決めよう!	別府大学短期大学部 学生さん	衛藤・後藤先生
5回目	3月2日**	発表会	志学館大学 大重先生	教員全員
6回目	3月9日***	次年度に繋がろう!	志学館大学 大重先生	教員全員

\*18時～18時30分、\*\*13時～14時、\*\*\*13時～13時45分



② 参加学生から寄せられた特徴的な感想(抜粋)

< 学びの協同化について >

- \* 他の学校・学生と繋がることのできる機会はなかなかないと思います。そういう中で、全国各地にいる学生とひとつのプロジェクトに取り組むということはとても面白いことだと思いました。
- \* 他の大学の人と交流がもてて、その地域のことを色々知れるから。

< 真珠価値探求プロジェクトへの期待について >

- \* 自分が今まで一度も考えたことがない新しいことに、とてもワクワクしました。
- \* 本来廃棄されるはずだったもので何かを開発するのが楽しそうだから。
- \* 今まで真珠はアクセサリなどに使われるものだと思っていたけれど、それをどんな風に使えばよいか、みんな考えていくことが出来るのは楽しそうだし良い事だと思うから。

#### <規格外真珠について>

- \* 素人が見ると規格外真珠もとても綺麗で、価値は充分に感じる事ができました。販売できない野菜や果物も中身の価値は変わらないのと同じ感覚なのかなと思います。例では、パールポークによる身体への影響などに、とても興味をもちました。
- \* 宝飾品で使われる規格には当てはまらないのかもしれませんが、成分は変わらないし、いびつな形もこの世の一つしかないという意味で価値のあるものだと思います。このプロジェクトで出すものはまだ決まっていませんが、出されるものに「規格外」という言い方はあまり使いたくないと思いました。規格外なだけであって、利用方法は色々あるはずではないかと思う。

#### <真珠価値探求プロジェクトに参加して>

- \* 一つの題材に対して、普段学校で学ぶことができないようなものを調べたり、発表する機会ができたこと。他大学との交流ができたこと。
- \* 真珠をどうやって広めていけばいいのかわ、他大学の方とそれぞれの特徴を活かしながら考えられたことがよかった。

#### <真珠価値探求プロジェクトの改善点について>

- \* プロジェクトゴールを明確にしてほしいです。目的は志摩市の価値創造ということでしたが、具体的なゴール(ステークホルダーが誰なのか、どんな成果物を期待しているのか)がないままスタートしたので、どこに向かえばいいのかがぼんやりしてしまいました。
- \* 議事録を残したらよいのではと思いました。次の回以降の資料作成やミーティング時の振り返りに参考になると思います。議事録作成者は各回大学で持ち回ればよいと思います。
- \* もう少し長い期間を設けて入念に調べる時間や、他大学とのディスカッションがあればよかったかなと思った。

#### <各短期大学の発表について>

##### 大阪夕陽丘学園短期大学

- \* 理系的な考え方が自分たちとは全く違いとても面白かった。今後、販売を考えて真珠プロジェクトを続ける場合は成分などに表示して考えることも必要だと大阪夕陽丘学園短期大学さんの発表をきいて考えることができた。
- \* 私たちが挙げた案に関して成分を調べてくれたり、方向性の後押しをしてくれたなと感じています。また、今回大阪夕陽が作ったお菓子、見た目もきれいで本格的だなと思いました。

##### 和泉短期大学

- \* マラカスやペン立てづくりと、劇や紙芝居を活用した真珠の歴史などを組み合わせた教育というアイデアはとても良いなと思いました。「教育には啓蒙と実践の面からアプローチすることが大切」というようなことが印象でした。
- \* 保育に携わられるとのことで、全く別の観点から真珠の価値を調べられてて、発想や提案など面白かったです。おもちゃなどにして真珠を幼少期から身近に触れていくことで、いい意味で価値も下がり、真珠がもっと近い存在になっていくのではないかと思いました。

##### 別府大学短期大学部

- \* 入浴剤の検証は「やってみた」だけでなく、対照実験や検証項目の設定などをされていて、効果検証の振り返りと課題出しをされていたので、次の検証が具体的にイメージできていいなと思いました。
- \* 私自身も温泉が大好きで、この春にも別府温泉に旅行に行きます。湯の華と真珠パウダーを混ぜて美容効果を検証するというのはとても興味深く見させていただきました。まさかそんな短期間で効果があるのかな?とワクワクしましたが、そんな甘いものでもないんですね。。(笑)でも継続すると効果を期待できるようで、新たな可能性としてすごく面白い発想だと思います。

#### <次に繋ぐための学生からの意見・感想>

- \* 他大学が発表時以外でどのように取り組んでいたか、うまくいったこと or いかなかったことを知りたいです。当校は毎回参加メンバーが少なく、ほとんど一人か二人で、喧々諤々と議論が起こることもありませんでした。リーダーやファシリテータもなく、集まりもなくプロジェクトというかたちになっていなかったです。他大学でどのようにされていたのかわかることで、次回以降の参考にできると思いました。
- \* 今回の真珠プロジェクトでたくさん意見が出て、本当にワークショップのようなものを感じた。例えば、3 大学にそれぞれの大学の考えたものを並べてみて、ほかの学生に見せるだけでも真珠の存在や価値を伝えることができると思うので、「真珠を布教するために」ということを目標として考えて行けたらいいなと思った。
- \* 次の課題は、「コミュニケーションを取る」ということかなと思います。今回は、各校それぞれが案を出して実行するという形でしたが、次の時は各校が案を出しそれぞれが1つのことを完成させるというのでもいいかなと思いました。

### ③ まとめ

真珠価値探求プロジェクトを実施して、真珠に関する知識の少ない学生が、プロジェクトを通じて独自の作品を考え、成長を実感した。また、異なる分野や他大学の学生との交流から刺激を受け、コロナ禍でのサークル活動がない中でも仲間と集まること自体を楽しんでいた。さらに、学生達が新たな価値を見出すために意見や資料を交換しながら、異なるバック

グラウンドを持つ学生同士が話し合い、提案を考え出した本プロジェクトは貴重な経験であった。

## (2) コンソーシアムサイトの整備

2021年に開催の短期大学教育改革 ICT 戦略会議に参加した、8短期大学40名の教員の方々に、2022年6月下旬から8月上旬に Google Classroom に掲載の「短期大学コンソーシアムサイト」の活動内容を更新し、コンソーシアムサイトの閲覧案内を行ったところ、3短期大学で閲覧が行われたが積極的に情報収集したようには見られなかった。

参加校の閲覧が進まない原因として地域貢献支援事業のコンソーシアムサイトの作り方を見直す必要があると判断し、本協会が支援事業を短期大学教育の中で進めようとしているのか、各短期大学が興味・関心をそそるようなストーリー的な説明を分かりやすく作り、誘導する仕掛けを以下のように見直すことにした。

- ① 学会のサイトはクリックしたらすぐに詳細が見られるが、Google Classroom のサイトはセキュリティ面からの制約で使えない。最初の入り口として私情協のホームページの一部に、コンソーシアムの活動を紹介する簡単なページを設け、活動全体をコンパクトに把握できるように表示した。なお、コンソーシアム活動の詳細を閲覧する場合には、情報共有の参加申し込みが必要であり、その上で Google Classroom サイトの閲覧方法などの案内を行うことにしている。詳細は、巻末の2022年度事業報告書の附属明細書【2-10】を参照されたい。
- ② 支援事業の内容と報告は、Google Classroom を活用してコンソーシアム活動のプラットフォームの枠組みを掲載することにした。その上で2021年度の活動報告からプラットフォームのサイトに接続し、支援事業の「経緯」、「概要」、「成果」、「ノウハウ」、「展望」を簡潔に紹介することにした。また、具体的な支援事業の取り組み状況、参加学生からの声、自治体等の感想などを掲載することにした。
- ③ 「私の授業」とか「生徒」という表現は、Google Classroom 使うには枠組みに慣れないといけないので、画面表示の名称及びストリームの構成変更の可能性について、担当者に打診したところ、仕様変更できないことが判明した。
- ④ プラットフォームの環境と運営は、支援事業の活動情報を短期大学が共有・活用できるようにするため、Google Classroom を活用しており、短期大学に費用負担は発生しない。クラウド型グループウェアの管理運営は、短期大学間で役割分担する必要があるが、当面本協会の運営委員会で対応することにした。

## (3) 来年度への対応

高齢者支援事業は、これまで短期大学の課外活動として2校で継続してきたが、来年度以降費用面などの負担を伴うことから継続していくことが困難な状況にあるので、コンソーシアム活動を休止することを考えている。

地域価値発見支援事業は、「真珠探求プロジェクト」のコンソーシアム活動を中心に進めてきた短期大学の参加が困難になったことと、高齢者支援事業に参加の短期大学が新たな観点で地域価値発見支援事業を実施している点も踏まえて、改めてコンソーシアム活動の在り方を来年度に再構築する予定にしている。

なお、社会問題の課題解決を通して、「市民としての自分らしさ」に気づかせる本協会の事業は学生から高い評価を得ていることに鑑み、コンソーシアム活動に多くの短期大学が今後も参加できるよう、来年度の「短期大学教育改革 ICT 戦略会議」で仔細を報告し、地域貢献支援活動を普及・推進していくための条件や課題、課外授業のノウハウ、学修成果などについて意見交流することになった。